

卒業生に贈る言葉

ある後輩への手紙

賀集 一

A君。卒業おめでとう。いよいよ社会人として出発だが、いろいろ期するところがあるだろうな。今後の心がまえを遠慮なく言えとのことだから、思いつくままを書くことにする。ただ僕は三十数年まえ同志社をでて、平凡に生活してきたサラリーマンに過ぎないから、君に教えをたれる資格はない。しかし自分の失敗の経験が、今後の参考になれば幸いだ。俗ッばいものになるが恕してくれ給え。

A君。まず君をみる職場の眼が、同志社出ということどこか違ふということだ。官公立や他の私大とはちがつた関心、好意ともいえるだろうが―これは有難くもあるが、このムードに溺れ、甘えたら危険だ。いま流に言えば、マイホーム主義に堕して、仕事にファイトをなくしてしまうからね。人生の目的は、個人の生

活を豊かに、幸福にすることにある。勤めはその手段にすぎない―とも言えるが、少なくとも社会人になつての三、四年、結婚するくらいまでは、仕事、仕事でバクシンしてほしいものだ。その道で大成するかしないかは、卒業直後の三年だと断言してもいいのではない。若い時は二度ない。初心忘るべからず。卒業して社会人になつた感激をもち続けて三カ年、ミッチリ仕事を勉強、スペシャリストとしての基礎固めをやつたら、後は自然とエキスパートへの道は拓けるし、さらに余暇に一般教養をつんだら鬼に金棒。レジャーも結構、麻雀、ゴルフもいいが、これは三十、四十をすぎても遅くはない。仕事で一步でも先んじようというからには、学校の試験勉強以上の努力がいる。しかもすぐ月給が上つたり、昇進に結びつくものでないが、長い一生、先きざきでは間違ひなく効果が現われる。これは君自身がひとりの人間として、成長するためにも絶対必要だと思ふ。さらに耳にタコのできるほどきいているだろうが、僕たちの頃も今も「学語ができる」と世間で思われているが、ところが残念、同志社出身かならずしもできるとは限らない。他の学校がレベルアップしてきているし、万

国博をもち出すまでもなく、これからはどんな世界、職場でも、語学がますます重視されるから、同志社出はメンツにかけて頑張らねばならない。君も何かで読んだ思うが、松下幸之助さんの言葉「これからはどんな企業でも、幹部たる者は、外国語の三つぐらいはできなければ、その資格はない」。そんな時代がもう眼のまえにきている。それも頭のやわらかい二十五歳くらいまでをやっておかないとモノにならない。

A君。最後に―就職して君の一番気を使うことは対人関係の難しさだ。これはどうしたらよいか。文学に関心をもつこと―幅の広い文学―読書をおすすめしたい。自分だけの世界では経験のできない、さまざまな人間の在り方、生き方を知るためにも。―また人間への、社会への関心をもち続けるためにも。ご自愛下さい。

(昭10大神卒・朝日新聞大阪厚生文化事業団参与)

難きこと自ら当る

大 宮 隆

会合などで「われわれの若い頃は……」「学生の頃は……」というような話が多く出るようになって、何年か前までは私自身が「また始まったぞ」という気持ちで聞いていたことが思い出され最近ではわれも老いたりの感を深くするようになった。

といったあとで早速であるが、私が学生の頃は角帽を頭にかぶ

っていたが、近頃は角ぼうを手にし、頭はヘルメットというスタイルが流行しだしたのは困ったことである。そしてまた、暴力を取締るのに警察を呼ぶとか、呼べとか、議論にならぬはずの議論がなされている。戦後にはなくなっただと思っていた特権意識が全く意外なところに残っていたものである。

「学生を云々する前にわれわれも反省せねばならぬこともある。」というような話が順序不同に出てくると、何から処理してゆけばよいのか混同されて、物事が解決しにくくなる。

議論以前のことはどこまでも議論以前であり、具体的に解決すべきことは、ハッキリ一つ一つ割切って処理してゆく方がよい。われわれが住む社会―大学を卒業される多くの方がこれから入り込む社会では、実績だけがものを言うところである。景気変動は別として、実践以外に利益は生み出されないということをハッキリ頭に入れておくべきである。

だからといって功をあせしてもいけない。あせるとツイ失敗も多くなる。落着いて一つ一つ着実に実行してゆくことが大切である。その基盤の上で未来を開発してゆかねばならない。未来の開発には、当然リスクを伴うものである。計画調査とともに勇気が必要である。自ら求めないものには決して与えられることはないわけで、「熟慮且断行」「難きこと自ら当る」という言葉を、私は座右の銘としている。

以上、少しでもご参考になれば幸甚である。

(昭12大経卒・宝酒造株式会社取締役社長)

いちばん新しいOBの皆さんへ

田 中 典 次

昭和十四年春大学を出たが、私の同志社時代は右旋回の時代であった。湯浅八郎総長も学園を追われ、特に末川博先生は私たちに三時間の民法講義中、二、三回授業を中断して、何か打合せに出られた。そしてうまく民法をしめくくって訣別の挨拶をして教壇を去られた。その時の「私は同志社に迷惑をかけたくないの同志社を去ることにした。学生諸君は私の屍をのり越えて真理の探究に邁進せよ」と言う意味の言葉は、今なお私の耳をはなれない。

その頃の同志社の学園騒動の原因は、同志社をよくするために有能な教授陣を揃えることが第一とする湯浅総長の構想にあったと言われた。この構想は当然のことだが、有能な教授を揃えることは同時に、無能な教授の退陣を意味し、死活の切実な問題ともなりかねないわけで、その身辺危機感の人たちが「時の力」と結んで保身のため、一部教授を赤とよび、或いは同志社学園そのものを反国家的学園として葬り去りかねない勢いで、われわれ学生をいらだたせたものだった。

当時「赤」ときめつけることほど社会的に人を葬るに便利な、そして決定的な言葉はなかったし、また同志社の教育は教育勅語に基づかない教育で、日本人として怪しからんと、まくしたてた。なるほど新島先生の教育綱領は教育勅語の公布より先に公にされたから、教育勅語に基づく教育という表現はないのが当然の

ことながら、国家の一大事のごとく騒がれたのは、今考えてみると文字通り今昔の感にたえない。

当時も今日も憲法を知らない国民は多からう。そしてまた今日教育基本法を知らない国民も多からうが、当時の教育勅語の国民への普及率はまことに高く、恐らく日本の歴史、社会の中で、これほど国民の耳目にしみこんだ文字は空前絶後ではなからうかと考えられる。当時の私たち学生は学園騒動に不安と不快感を強く感じながらも特別な行動に出ることはなかった。情熱がなかったのか、意気地がなかったのか、国家権力が強大であったのか、また小利口であったのか、悪賢かったのか、要するに世の中は右にゆれていた時代で、中正ではなかったのは事実である。

あれからちょうど三十年、戦争中、戦後、私は二、三年に一度は同志社の中をトボトボ歩いて見た。別に目的があったわけではなく、ただ歩けばそれでうれしかったわけである。学生当時のままの建物、そして古い樹木は今もそのままであるが、戦後、同志社も随分変わったと思う。

いつ行ってみても校舎の増築また増築である。もともと決して広い敷地でもなかった学園が、さらに窮屈でぎしぎしした感じがしてならない。校舎が収容力を増大し学生数の数がふえることは大きな発展かも知れない。しかし唯それだけで無条件に喜んでだけおれるものもあるまい。

私は去る三十五年秋、京都会館で行なわれた同志社創立八十五周年記念式典における高山京都市長の壮烈な祝辞をきいて、本当の祝辞はこんなものかと感心した。祝辞というものはその場にい

はったりのない実力を養え

原 田 敬 一

る人たちをほめたり喜ばせたり、更にお世辞の一つ二つは附け加えるのが世の常と考えていた。高山さんはまず学生の不法法をきつく叱られた。と言うのは学生が出来上ったばかりの京都會館でトイレットペーパーの長いのを面白半分投げ散らしたりしたらしい。高山市長さんは次に、同志社を創立百年の頃には更にいろいろの学部を揃えた文字通りの綜合大学にしたいと言う当局の考えに對して、ともすればおちいりがちなその商業主義的教育に強く頂門の一針を刺された。私は商業主義的教育を無難作に批判しようとは思わないが、この祝辞が——祝辞というよりむしろ大説教と申したい——自らの運命をにぎっている選挙区、選挙民の前に堂々と展開されたことに私は驚嘆したのであった。同志社はえらい来賓を持ったものだとい人で快哉を叫んだ。

今日の同志社で私たちの時代とちがった第二の点は、学園内に見る学生自らの活発な活動である。学園内に貼られた文字或いは配布される文書は、驚くべき量と多種多様にわたるであろう。その積み重ねはほかならぬ新卒業生諸君自身の努力であり、その集計も分析も新しいOB諸君によってこそ、最も詳細に説明され得るものである。

卒業生諸君は学生から社会人に急変する。しかし学生ではなくても学生に一番近い人々にちがいない。私は新しいOBになられる諸君が諸君でなければ持たせない「学生に最も近い人たち」として、同志社を明るくて健康な学園へとリードして行かれることを祈念しつつ、晴れの卒業に心から祝意を表し、健康と発展を切に祈り上げるものである。

(昭14大法卒・校友会熊本支部長)

先日、ふと朝のテレビをひねったところ、まったく偶然にも今サラリーマンの税金についての訴訟を起しておられる大島教授の対談の場面に出くわした。その中で教授が言われるのに、訴訟を起してから税務署のいやがらせらしい特別調査を受けた。ところが同志社ほどきれいに税金を払っている学校はそれほどないぐらいであって、結局は税務署のカモになるようなことはなにもなかった、ということである。

私は同志社の現状を理想化して眺めるほどナイーヴな人間ではないけれども、少なくとも同志社がはったりのない誠実味をもったところであると考えている。これまでの日本の社会では、そして多分これからも或る程度まで、こうした同志社の伝統は同志社卒業生にとってあまりプラスになってこなかったかも知れない。政界・官界そして実業界の中で同志社卒業生の活躍が、たとえば帝大・早慶の卒業生に較べて見劣りがしてきたのはそのようなところに一つの原因があったのではなからうか。しかし、日本の社会が今急激に変わりつつあるのは諸君も御承知の通りであって、これまでのように学歴・学閥・はったりだけでは通用しない実力の世界にならざるを得まい。

私は一九六六年から六七年にかけてインディア大学で客員研究員としての生活を送り、そこにいた約八十名の日本人学生、研究

員、教授たちの姿を見た。そこで特に面白かったのは、いわゆる旧帝大を卒業してきた人々が日本では当然通用するはずの事大主義の学歴がさっぱり通用しないのでまどつている有り様であった。どの大学の出身であらうと問題はその人が今示しうる実力である、とするアメリカの大学の厳しさに自分の本当の姿を見せつけられて悄然として日本に帰ってしまう人だの、日本人の仲間たちに「私は〇〇大学の出身です」とふれ歩いて物笑いの種になっている人が多かった。それと対照的に招聘教授としておられた同志社の本間賢史郎教授、弥生夫人、博士コースで研究をしておられた坂本完春講師、その他二人の大学院学生としていた同志社卒業生たちが着々とその実力を発揮し、アメリカ人教師や学生たちの尊敬を集めている姿を目のあたり見て大いに欣快であった。

私は別に同志社ナショナルリズムを唱えているわけではない。ただ、近い将来にきつと訪れてくる日本での実力主義社会の中で、同志社卒業生諸君に、良心と誠実と柔軟な精神を基にした、そして百年の大計に基づいた同志社教育の成果が必ず問われることになるだろうと考えるのである。その成果を社会に示すために卒業生諸君は一層はつたりのない実力を磨いていただきたい。そしてそれをなおも効果的にするために、これまでの同志社人の弱点であった非協力を改めて、団結をし互いに助け合つて社会で活躍をする姿勢を持っていたいだきたいと思うのである。

(昭26大卒・千葉大学助教授)

社会と結びつく個人生活

杉 江 栄 一

もう十数年も前になろうか、私自身が送られる立場にいた時のことである。なにかのささやかなお別れパーティの席上で、私は卒業証書を示しながら、「この卒業証書はつまり失業証書です」という意味の駄洒落をとばして皆を笑わせたことがある。他のことは忘れてしまっているが、「卒業生に贈る言葉」というテーマで原稿依頼をうけた時、妙にこのことだけを不意に思い出す破目になってしまった。といっても、私はこんなつまらない駄洒落が気に入っているわけではもちろんない。むしろ逆に当時としてはこれを単なる駄洒落としてすましえない深刻さがあったのである。

私の同期生の何割が卒業と同時に就職しえたかはつまびらかでないが、その数は多くなく、また意にそわない就職を余儀なくされた学友にとって、その笑いはまことにほろ苦いものだったことは確かである。それは、敗戦国民だという負い目も手伝って、今日では想像もできないような深刻な就職難の時代であったもちろん私自身の就職も決っていなかった。しかし私はその時、個人の運命が政治や社会の運命に切り離れがたく結びつけられていることを、単なる理論としてではなく実感として思い知らされた。そして将来の生活の見通しなど全くたななかったにもかかわらず、そのことが、ともかくも私を研究者の道に踏み出さしめた契機のもう一つである。

ひとつでもあった。

それはともかくとして、自来十数年のあいだ私は毎年卒業生を送る側の人間としての生活を続けてきた。考えてみるとその間、結局は送る者の傍觀者の無責任さのゆえか、それとも私が怠け者であるためか、抽象的な勵ましの言葉以上のことを言つた覚えはほとんどない。あるいは、人間は結局自らの運命を自らで切り開くべしという哲学からすれば、それで十分なのかも知れない。だがその哲学そのものの正否が問われているとしたらどうであろうか。本当はこの哲学の眞価が問われてから久しいのである。私は就職難という形で個人と国家社会との運命のつながりを自覺する體驗のひとつを得た。今の諸君は、より豊富かつ複雑な形でその體驗を得ているにちがいない。問題はそれをどう生かすかにある。この體驗は本来、人間、とくに青年に、現状への批判と変革を迫るものであるが、他面で人間は、その體驗から逃避し、別の體驗にそれをおきかえ、そしてさっきの哲学に復帰する。その方が容易であり、時には快樂でさえある。とくに現代の複雑な社会ではその傾向は強く、極端な場合には豊富で複雑な體驗を整理する能力すら失うことになる。そこから安直な社会人が生まれる。この意味で大学卒業とは、社会人への出発ではなくて、いわばもっとも肉面的な意味で人生のひとつの岐路だというべきであらう。少なくとも卒業証書は、青年を忘却したことゝの証明書でないといふべきである。

(昭29大院法卒・中京大学教授)

歴史を見つめる

純粹さを忘れずに

宮本 栄 三

最近の世相は、現象的には逆立ちをしているようにみえる。かつて卒業生に贈る激励の言葉といえば、月並みに「波風の荒い社会に旅立つとか、厳しい人生の試験に耐えて」とかいふふうに学園生活を静かな平和なものとして考え、反対に卒業後の社会を激しい競争の社会、弱肉強食の社会としてとらえ、静から動に転ずるに際しての処世訓めいた個人倫理的教訓を餞けの言葉として贈るのが常であつた。しかし今や大学のイメージは、紛争につぐ紛争で揺れに揺れ、反対に学園の外では昭和元祿の太平ムードが謳歌されている。社会生活の弱肉強食性は今も本質的に変わらないにもかかわらず、その意識がやゝもすれば影を薄めるほどに、一方ではマイカー、マイホームがささやかれ、他方大学問題が重大な社会問題と化してきている。

ここ数日、私の目はブラウン管に映しだされる東大紛争の一駒一駒に釘づけにされざるを得なかったが、機動隊の導入という権力的強圧手段によつては、大学に眞の平和と秩序がもたらされるものではなく、反対に大学紛争一般は今後ますます激しさを加えてゆくであらうと思われる。「あれは社会から隔絶された、別世界の出来事である。作家杉森久英氏は、東大紛争を「騒然たる悪夢」と評し、「研究室なんかみんな足音をしのんで歩いた」かつ

ての東大をなつかしんでいる（朝日一・一六）。このような懐古趣味の見方によれば、批判されるべきは「部暴力学生たちであるということになり、現代社会の根底に横たわる本質的問題は全く捨象されてしまう。

現代は変革の時代である。かつての元禄文化が封建社会の内部矛盾の激化につれて寛政の改革等幕藩体制の立て直しを要するようになり、更に明治維新によって封建制そのものが不完全ながら否定されざるをえなつたように、まさに現代が昭和元禄であるならば、やがて新たな社会構成にとって代られざるをえないことは明らかである。かつて松下村塾の塾生たちが幕末の新しい息吹きを敏感に捉えて行動したように、現代社会の矛盾を敏感にキャッチして、その変革のために行動する者、それが若く純粋な学生であつて何の不思議があろうか。

このような時、「ご卒業おめでとう」など月並みの祝辞をのべるのは止めにしよう。変革を要しながら、しかも太平の眠りを続ける現代社会の中で、学生時代と同じような歴史を視つめる純粋な眼をもちつづけるということは、かえって世間的には苦勞多くしたがって勇氣のいることだからであります。最近いわゆる過激派学生の暴力行為とは反対に、一般学生の卒業後の急速な保守的社會人化が指摘されていますが、私は卒業される諸君らに「眠るなかれ、常に目覚めて歴史の流れを見つめよ」と申しあげたい。今日の大学紛争の原因の一つである一九七〇年問題のなかで、われわれは米國との軍事的隷従關係を続けるか、眞の自主・獨立を遂ぶかの選択をせまられています。新島先生は幕末に國禁を犯し

て脱國し、眞理を海外に求めようとされたのは何の故であつたか。自己と社會の変革の理論を世界史の潮流の中で見出したいというやむにやまれぬ願望からではなかつたらうか。先覺者の勇氣と苦勞を偲びつつ、現代に生きるわれわれ同志社人は、今後百年の歴史の中で、眞に批判に耐えうる選択をなすべく勇氣をもつて進んでゆきたいものであります。

（昭37大院法卒・法学部嘱託講師）

